

バイオグラフィー

ロングバージョン

「ドニ・ルヴァイヤン」

by ダヴィド・サンソン

フランスの作曲家でピアニストのドニ・ルヴァイヤンは、現代のミュージックシーンでも最高の音楽家の一人に数えられる。1973年以降、ジャズのエネルギー溢れるリズムと大衆的な音楽を、フランス音楽の伝統に基づいた新しいオーケストラの色彩と融合させ、広い分野（オペラ、バレエ、オーケストラ、室内アンサンブル、合唱、ソロ、電気音響、ラジオ作品）をカバーする、オリジナルでヴァリエティに富んだ、あらゆる人々に向けられた作品を創造し続けている。

6歳でクラシックピアノを始め、12歳でラヴェルの《高貴で感傷的なワルツ》をレコーディング。当時のピアノ教師マドレーヌ・マンジャンと共にモーツァルトの協奏曲を演奏する。彼女からは和声学、対位法などの、エクリチュールの基礎も教わった。1970年代始めにクラシックを捨て、ダンス、ジャズ、即興演奏、サーカスに没頭する。このような「生きた」学習期間に、後にその分野で欠かせない著作となる1980年出版の『**L'Improvisation musicale**（音楽即興）』の素材を引き出した。1973年には、国営ラジオ局フランス・キュルチュールのクリエーション・アトリエのために、最初のラジオ作品《Circus Virusシルキウス・ヴィリウス（サーカス・ヴィールス）》を創作している。これをきっかけにラジオのための創作を長く続けるが、その中で、1988年には《Speakersアナウンサー》でイタリア賞のRAI賞を受賞した。平行して、1974年には哲学のマスターを取得。

1980年代初めには舞台芸術への取り組みをはじめ、独自のグループ「ブルー17」とともに、歌、演劇、マジック、楽器、照明、音響などを織り込んだ新しい形の音楽劇を創作。1983年初演の《Deux pièces à louer貸し二部屋アパート》を皮切りに、強い想像力に満ちた約15点のユニークな作品を創り出している。もっとも最近の《Un petit rien-du-tout neuf まっさらの小さなとるに足りないもの》は2006年4月にパリのロン・ポアン劇場で上演された。大きな反響を呼んだ作品の中では、アメリカのジャズミュージシャン、パール・フィリップとバリー・アルシュルとのトリオで上演された《Les passagers du deltaデルタの旅人》と、アンドレ・アンジェル演出エンキ・ビラル舞台装置で1990年にアヴィニョン演劇祭で初演されたオペラ《O.P.A. Mia》が代表作。

フランス国立視聴覚研究所のフランス音楽研究グループによる音のデジタル処理の開始に参加し、この新テクニックを楽器に応用。《Piano Transit》（1983年）から《Drama Symphony》（1995年）、《ElektroSpacePiano》（2003年）まで、常に探

求を続けている。混声合唱のための《黒い石》（1984年）からは、声楽によるハーモニーとポリフォニーで独特の探求をはじめ、現在も続けている。

この時期、振付家（D.バグエ、D.プティ、C.マルカデ、B.ルフェーヴル等）や演出家（とくにアラン・フランソン）とのコラボレーションも多く手がけ、作曲家として40以上の創作に携わっている。

1983年には、フランスの最高の芸術家に与えられるヴィラ・メディチ賞を受賞。

1990年代初めはオーケストラ曲、器楽曲を主に作曲。ピアノ協奏曲《Echo de Narcisse ナルキッソスのエコー》（1995年）や弦楽四重奏曲第二番《Le Clair, l'Obscur明、暗》（1997年）、オーケストラのための協奏曲《Paysages de Conteおとぎの風景》（1998年）や、カウンターテナーと混声12声部のための《Tombeau de Gesualdoジェズアルドの墓》（1994年）などが生まれている。

1995年、アンサンブル・アンテルコンタンポランとルーブル美術館は、フリッツ・ラングの最後の無声映画《月世界の女》のための音楽の作曲を依頼。1999年には再び、一夜を徹した《Eloge de la Radioラジオ礼賛》を創作。2000年にプレザンス現代音楽フェスティバルで初演された。

2002年にはパリ・オペラ座がバレエ用からオーケストラ作品《ドガの小さな踊り子》を委嘱される。2003年のガルニエ宮での初演および2005年と2010年の再演は大成功をおさめる（2010年にはヨーロッパ全土の60以上の映画館で同時中継される）。2005年には、ジャック・プレヴェールの童話によるオーケストラと語りのための《Opera de la lune月のオペラ》を作曲（フランス放送フィルハーモニー管弦楽団委嘱作品）。

2014年にはアメリカ合衆国の15の州立大学から招かれて、講演会、マスタークラス、自作演奏会などを行う。

出版編集者フレデリック・レイボヴィッツとの協力体制により、録音済みの代表作品は、世界中で、映画やテレビ番組に常に使用されている。最近では2013年のカンヌ映画祭大賞を得た『アデル、ブルーは熱い色』のサウンドトラックやリアーナのビデオ